第５回ブータン旅行【下】

（２０１９年４月１８日～４月２５日）

４月１８日（木）

３：３０排便。（わざわざ書かなくても、と思われるだろうが重要なことなので。）ベッドに潜ってぼーっとしていると、とぎれとぎれにだがいくらでも眠れる。そしてその合間にいろんなことを考える。
「もう飽きた。疲れた。早く帰りたい。」というのとは違うのだが
「いいのかなあ、こんなことをしていて・・・。早く日本に帰って日常の仕事に戻らないとお天道様に申し訳ない。」みたいな気持ちになることがあるのだ。ああ、私も日本人なんだなあ・・・。

私自身が心から望んでやっている旅なんだからこれが私の本来の姿であり誰かに申し訳ながることなんてあるはずないのに、どうもこういう時「これは本来人間の本分である日々の労役を精一杯頑張ったから与えられた特別なご褒美なのであるからほどほどで切り上げて、このような贅沢なことはそろそろ世間様にお返しするべき」みたいな考えがどうしても湧いてくるのだ。でもこんな場所にいると帰ろうと思っても簡単に帰れるわけじゃない。たとえ今の瞬間に家族のだれかが死んだという知らせが来たとしたってすぐに軍隊や自衛隊の飛行機か何かが迎えに来てくれてそれに飛び乗って帰れるわけじゃなし、（仮にそうだとしたって家に着くまでに十時間以上かかる）普通の観光客の身分ではガイドさんや旅行会社さんをアタフタさせた挙句、どんなに特別な手配をしていただいても勿論追加料金を払っても家に帰りつくまでに最低二日はかかるだろう。

だから私はそんなこと考えたってしょうがないんだ、予定をその通りにこなすしかできることはないんだと思うので、まあ、開き直ってぼーっとしていられる。だからどんなにヒマでも「こんなことをしていてはいけない」という焦燥感にそんなに駆られなくてすむ。日本にいたら「することがない、なんていうのはやるべきことを探そうという努力が足りない」ということになるのでヒマなことがストレスになってしまうのだ。

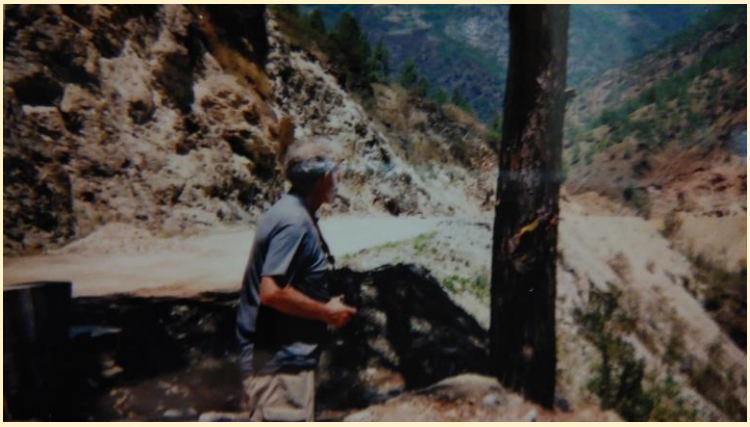
３：４０、お腹がすいたので昨日買ったラーメンをマグカップに作って食べた。（マグカップはここの備え付け）けっこう辛めだったがやわらか～く作ってゆっくり食べた。ここ数日身体が醤油味を渇望している気がする。このラーメンは醤油味ではないが、幾分似ている感じもする。汁の残ったのは辛いのであとでまたお湯を沸かしてそれをさして飲むつもり。

今朝は雨は降っていない。そのせいか停電はなかった。

７:００すぎに朝食。食堂でノルウェイ人の親子三人連れと会話。しかしなかなか英語が出てこなくて困る。いつもキンレイさんと日本語で喋っているものだから。twelve とか　thausand さえなかなか出てこない。三十代ぐらいに見えるお嬢さんは今回初めてブータンに来たのであるが、ご両親はペマガツェル（モンガルの南にある県）で四年間も病院のエンジニアとして働いていらっしゃったそうである。

８：２０出発。引き続き太古の森に覆われた山々の、まるでリアス式海岸の崖の横っ腹を丹念にトラバースしていくようなドライブを継続する。あまり美しくないのはホテルの周囲の市街地だけで、他の地方に続く街道沿いはやはり自然の中の道である。おかげで私はすこぶる元気である。

小屋掛けでやっている小さな店。左端の緑色のジャーに餃子が入っていた。あとはドリンク類。ゆで卵もあった。



この方も観光客。

しかしそのうち瓦礫だらけの山腹が連なる地域に至る。道路拡張工事中なのだそうである。その途中、時間決めで通行止めになる場所に至る。１０：５０～１２：００の間ここで立ち往生になる。しかしそこにはトタンとブルーシートの小屋掛けがあり、ゲート番のお姉さんが編み物をしながら小さな店をやっていた。瓶入りのドリンク数本と、魔法瓶入りミルクティーと、保温ジャー入りのモモ（ブータンのぎょうざ）とゆで卵を売っていた。ミルクティーとモモを買って昼食とする。（こういう時やセンゴルの村のレストランで、のような外食をする場合には全部ガイドさんが支払いをする。ホテルはもちろん予約してあるが、飲食店は予約していない場合もありそこはお金を預かっているガイドさんの裁量で行動する。）そのモモは日本のぎょうざとほとんど同じ味で柔らかくて美味しかった。蒸してあるらしく焼き目はなかった。やや大きめで、私は五つでお腹が一杯になった。

車はタシガンに向かっている。タシガンに入る少し手前に分岐があり、タシガンに行く前にそちらの道をかなり長いこと登って山の上のダミツェ・ゴンパに詣でる。（ゴンパというのもお寺のことのようだがラカンとゴンパはどう違うのか聞くのを忘れている。）ここは何だか有名な観光地という雰囲気で学生らしい青少年の団体や、一般の人たちがずいぶん来ていて車もたくさん停まっていた。お寺の中を見せてもらおうとしたら正面入り口の戸が閉まっている。ブータンのお寺では初めて見た大きなガラスの扉のついている玄関だった。ガイドさんは通りかかった中学生ぐらいの少年僧を呼び止めてここを開けて中を見せてもらえるように責任者に頼んでほしいと言った。開けてくれる責任者の人はなかなか来なかったがガイドさんは粘った。やがて二十分ぐらいたってから責任者が来て、私たちは中を見せてもらうことができた。が、玄関がたいそうモダンであった割には中は普通のお寺に見られるような構造で、申し訳ないがどういうふうなところだったか私はさっぱり思い出せない。

そのころから私はトイレに行きたくなっていた。だがブータンというところはなぜかこういう人が大勢集まるとわかっているところにも関わらず来訪者のためのトイレというものはまずない。（もちろん僧侶たちが使用するトイレはあるのだろう）日本に限らず大概の国には公共の場所には有料であるにしろトイレはあるもの

だろうと思うのだが何故なのだろう？そこらへんですればいいじゃん、ということなんだろうか？仕方がないな、ホテルに着くまで我慢しようか、と思っていたらキンレイさんが探しまわってくれた。そして「この先にあるそうだ。」と教えてくれた。

そこはお寺からしばらく下ったところで民家やお店（かもしれない。一見してはっきりわからない場合も多い）小さな建物がごちゃごちゃ集まっているところの間に小さな水路のようなものがあって、それに沿って下っていく細い道があった。「この先にあるって。」と言われて恐る恐る下っていくと下にもまた大きめの道が横切っていた。そのあたりを見回してみるがトイレらしいものは見えない。それでその近くのお店かもしれない一つの建物の中を覗いてみると年配の女性がいたので「チャプサン・ガテ・モ？」と聞いてみた。これは「トイレ・どこ・ですか？」という意味である。が、相手には意味がわからないようであった。あれ～？このあたりの地方ではやっぱり西部地方で使われているゾンカ語は通じないのかな？困ったな。英語じゃなおのことダメだろうしな・・・。試しに英語でも言ってみるがやはり通じず。

困って、私はちょっとしゃがむ格好をして見せた。するとおばさんは「アー、チャプサン！」と言って、「そっちだ」と指さしてくれた。何だ、チャプサンでいいんじゃないか。私はそんなに発音が悪かったかしら？（それ以降、ブータンを出国するまでどこへ行っても「トイレ」は「チャプサン」で通じた。

やっとわかったトイレはもちろんブータン式。和式と同じでしゃがむのである。使用後は汲み置きの水をかけてきれいにする。しかしそのトイレは木の小屋の中にあって、その小屋は窓がなくて戸を閉めると中は真っ暗だった。真っ暗では用が足せないので仕方なく戸を少し開けたまま用を済ませた。幸い終わるまで誰も外を通ることはなかった。が、きれいに使えたかどうかまでは見えなかったのでわからない。申し訳ないがあとは野となれ山となれである。

タシガンからラディに向かう途中

カエルの形をした岩がありびっくりしたが、これは自然の色なのではなくて彩色したものなのだそうだ。なんだ・・

そこから後は今日の宿に向かう。タシガンの町を一度通り過ぎて少し奥地のラディという村まで行く。着いたところは「ラディ・ツァンカル・ホームステイ」という民宿のようなところ。ちゃんと個室でありベッドが二台と寝具があり、室内にトイレがあり、トイレットペーパーもちゃんとついていて洋式で水洗だったがシャ

ワーはなかった。そういえばこれから三泊続けてシャワーなしなのである。だから前日のホテルではちょっと面倒だったがちゃんと全身を洗ってきた。

ラディの村近く

ウェルカムティー。おなじみのビスケットと炒り米。

寝室。部屋は問題なかったが鍵に問題があった。

家にも連絡。充電設備は問題なし。しかし最大の難点が部屋の鍵の具合がよくなかったこと。開けるのは何とかできるのだが私の力では鍵が閉まらない。強い人が外から閉めてくれても意味がない。私が中から閉められるんじゃないと・・・。それで前日は物干し用に使っていた紐を取り出し、鍵に細工をしてちゃんと閉められるようにする。ＧＪである！

そこに着いたのは１６：００過ぎであったが何だかすごく暑くなっていた。私はその日と前日は持参した中で最もきちんとしたキラで装っていたのだが着いたとたんに着替えてとてもくつろいだ姿になってしまった。半袖のＴシャツに膝下５ｃｍぐらいの軽いジャンパースカートである。この宿の奥さんも軽装で、Ｔシャツのような服にハーフキラであったが、こちらの方は暑くても足首から上を出したりしないのでちょっと驚いた顔をされた。

ミルクティーとビスケットをいただいた。ビスケットと共にブータンでお茶の時によく出される炒り米のようなスナックがあるのだが、不味いわけではないのだがただ米の味がするだけで塩味も甘みもついていないのでそうたくさん食べられるものではない。ビスケットはなぜかどのホテルでも同じものが出る。マリービスケットとダイジェスティブビスケットの中間ぐらいの味で、お腹がすいていればたくさん食べられる。

夕食は八時ごろだという。夕方にティータイムをしたので大丈夫だろう。部屋で小物の洗濯をする。シャワーがないのになぜかバスタオルがベッドの数と同じ二枚備え付けてあったので一枚をタオルドライ用に使わせていただく。しかしこの部屋にはヒーターがない。紐を張り通すのに都合の良いものもないが、窓の付近で干しのテクニックをいろいろ考える。

さて部屋で時々ガイドブックや予定表などを見ながらぼんやりベッドに寝そべっていたのだが、突然予想外のことが起きた。６：５０ＰＭごろからお経と鉦や太鼓の大音響が流れ出してきた。ブータン人は皆敬虔な仏

教徒であることはわかっていたが、お寺に行った時でもこのような場面に遭遇したことはまだなく非常に驚いたし実に困惑した。うるさい！頭に響く。しかもその音響は一時間弱にわたって続いた。胃が痛くなってきた。

そしてなぜか右腕の筋が痛むので湿布を貼る。（今回の旅で持参の医薬品が必要になることは一度もなかった。カットバン一枚使うことがなかった。湿布薬も足や腰からお呼びがかかることはなく、なぜか腕にだけ二度貼った。）大音響の副作用か空腹がちょっと辛くなってきたのでそれをやりすごすためにチョコレートを少し食べる。

７：５０ＰＭごろから食事。今までより食べやすい味と食感であった。飼い猫が部屋の中をうろついてしきりに私やガイドさんたちに食べ物のおねだりするがみんなで無視する。あんたにもそのうち食事があるでしょうよ、と。おいしかったがやはり私はそんなには食べられない。が、ガイドさんたちは相変わらず私の 5，6 倍量を元気に食べる。

食事の後もお経の声がした。大音響ではないが。ガイドさんから聞いたところによるとこの宿のご主人はお坊さんだということである。それならしかたがないなあ・・・。

４月１９日（金）

昨夜は１０：００過ぎに寝て、朝は３：００ごろ目が覚める。

５：００過ぎ、チョコレートとアーモンドを少し食べる。

５：４０、朝の勤行が始まった。でも前夜ほど長くはなかった。めげずに残金計算をする。

昨日お寺でお賽銭を５ヌルタム出したので３８９５ヌルタムと２５０ドルあるはずだ・・・。あった！

キンレイさんにチップを１００ドル、ウゲンさんに５０ドルと２０００ヌルタムを予定し、別にしておく。（ドルの残りはインドの空港やシンガポールで使えるかもしれない）

残り１８９５ヌルタムはできるだけ減らさないでおいて国境付近でインドルピーに替えてもらわなくてはならない。ちゃんと両替する場所があるだろうかとちょっと心配。２３日の夜の食事はついていないのでその食事代とインド側のガイド、ドライバーさんたちへのチップ用にルピーを用意しておかなくてはならないのである。ヌルタムとルピーは１対１の固定相場だそうで、ブータン国内でも少額ならインドルピーが使えるが、その逆は使えないのだそうである。今回の旅はお賽銭とチップのやりくりにけっこう頭を悩ませた。

チャーハンが嬉しい

この日の朝食はチャーハンと炒り卵とちょっと辛みのある福神漬けのようなものとミルクティーでとても美味しかった。ブータンの白飯はやや食べにくいのである。トースト、バター、ジャム、バター茶もセレクト

できたがそれらは無視した。「日本人はバター茶が苦手なようですね。」とキンレイさんが言っていたが、そう、あれは飲めないことはないのだが塩気のないスープのような感じで特に飲みたいものではないのである。

朝食後は１０：００の出発まで部屋で荷物の整理をしたりぼーっとしたりして体調を整える。この日はこの家とご近所で何かイベントがあるらしく、外で人々が何か準備のようなことをしていて賑やかだった。

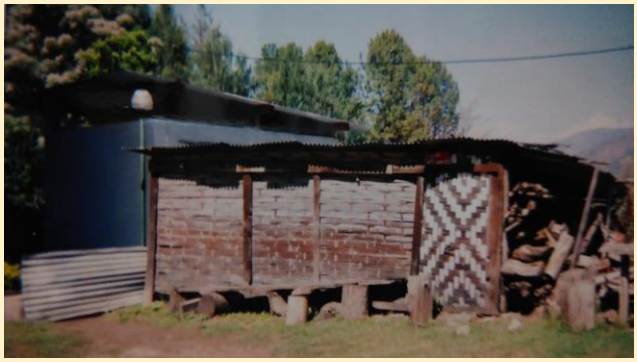
「買い物をしながら行くので」とキンレイさんが呼びに来て 9：30 ごろ出発。ここからは道が狭いということで四輪駆動に乗り換える。そのことは予め知っていたのだが、あれ？運転手さんが違う人になった。今までの運転手さんも車に同乗して四人で出発。すなわち私一人のためにお供の男性が三人という状態になる。そしてもう一つ大事なことがある。チップを渡す相手が一人増えたということである。

ここを出る時部屋にチップは置いてこなかった。そのかわりご主人に「皆さんでどうぞ」と言ってアメの袋を置いてきた。十二個ほど入っていた。自分で食べるために持ってきたものであるが、どうも今回は舐めるとむせるのであまり舐めなかった。これからもあまり減らないだろうと思い手放すことにした。こういう宿で部屋に１００円や２００円のチップを残していくというのが何かそぐわない感じもした。何だかいつも近所の人たち？が何人も集まっているし、むしろアメのほうがいいだろうという気がしたのだ。

出発して間もなく食料品店に寄った。言われなくては外国人には店だとはわからない建物だった。キンレイさんたちは野菜や卵などいろいろな食材を買っていた。「自炊するのだ」と言っていた。今日から二泊する山奥のメラという村の宿は山小屋みたいなものらしい。しかも食料は自前で？へえ～・・と思った。「ウゲンさんは料理が得意だ」とキンレイさんが言ったので、「それは楽しみです。」と言っておいた

多分村に一軒だけの食料品店

同じ敷地の中にあった。鐘撞堂ではない。マニ車。



これは倉庫のようです。

その買い物の後間もなく不意に車が止まった。周囲には何かの畑が広がっているゆるい斜面の途中である。ガイドさんたちが車を降り道の脇のフェンスに依るようにして何かいろいろ言っている。私はぽつんと車の中に取り残されたまま「何だろう？何かトラブルが起こったのかな」とやや不安に思いながら待っていた。しかし別にトラブルが起こったわけではなかった。彼らは周囲の畑の持ち主である農家の人に野菜を分けてもらお

うと交渉しようとしているところだった。

やがて用事がすんで車はどんどん山道を登って行く。四駆で行かなければならない道であるからなかなかエキサイティングである。窓の上にある取っ手につかまって跳ね上がる身体を支えながら私の心も弾んでいた。外は絶景などというものではない。文句なく私好みの風景が広がる中を四時間近くもガタガタと２０００m以上の標高差を登っていったわけである。

道中にあったがどういう名所なのかわからない。

１３：３０ごろ標高３５１０mだというメラ（正確にはメラックと発音するらしい）という村に着く。ヤクの放牧と木工家具の制作を生業としているようである。二日前に行ったコマ村も家が密集していたがこの村も家が斜面の上に階段状に密集していて驚いた。民家の形状は他の地方とそんなに目立った違いはないが、木でできている部分が他の地方の家よりも多いかな、という感じだった。家々とその間を繋ぐ通路との間に、燃料にするのであろうマキがぎっしり詰まっているのが印象的だった。標高が高いので当然気温も低いのだろう。

メラは木工所のような小さな家々が密集した集落であった。

「メラ・ファームハウス」という宿に着いた。ここも民宿のようなものである。そしてシャワーはない。トイレは外にある。外といっても家と隣接する小屋の中ではあるが。そして水洗ではあるが水の流れはよろしくなく補助として汲み置き水の大きなバケツが三つぐらい置いてあった。私の泊まった部屋は二階だったが階段は外。「梯子」と言った方が正確である。田舎の民家はどこもそのようだが。夜中にここを上り下りするのはしんどかったがやむを得なかった。

１４：００ごろ昼食をいただいた。今までラディの民宿においても食事の時にはテーブルと椅子が用意されていたがここでは床の上に座るかたちだった。（もっともほかの家でも私たちが客だからそうしてくれたという感じでもある。民家や民宿においてはちゃんとしたダイニングテーブルではなくてソファーの前に低いテーブルが置いてある場所だったりテーブルがあり合わせの箱などによる急ごしらえだったりするのだから。つまりブータンでは伝統的に床に座る生活をしていたのである。）居間の奥の方に薪ストーブの火が燃えていて、その周囲に座った。

メニューはやはりブータン定食。どこの地方に行っても食事の形態にはほとんど違いがないようだ。（こんな風に考えるのは日本人の食生活があまりにも多様化しているからだろう。ヨーロッパでも一つの国の中では一般家庭や町のレストランでは朝はこう、夜はこう、とだいたい似たようなものを食べている。）ただし「自炊」ではなかった。この家の方が作って下さってあったものをいただいた。（これから一から作っていたら昼食ではなくなってしまうよね。）食べやすい味だった。

薪ストーブで調理をする民宿の奥さん

いただいた昼ごはん

私の泊めていただいた部屋はウッドハウスそのものという感じで、なぜか隅のほうに美しい手工芸品が並べてあった。ベッドが三つあって私は一つだけ寝具の載っていたベッドで寝たが、あとの二つの上には無造作に置かれたマットレスの上に誰のかわからないスーツケースが置いてあったりした。部屋の壁はほとんど削りっぱなしの白木だったが木目が美しかった。特に天井の梁に使われていた材木の肌の模様は自然のものなのか彩色したものなのかわからない不思議な色だった。

スマホの充電もちゃんとできた。しかし時々停電することがあった。二泊している間に二回停電した。しかし二回とも２０～３０分で回復した。

泊めていただいた部屋のコンセントはこんな感じ

家のまわりはこんな感じ

これは医師も常駐している病院だそうです。

昼食と夕食の間の時間はベッドに潜り込んでいた。寒くて他のことをしようという気がおこらない。それに空気の薄いところである。あまり動き回らないほうがいいとも言えるだろう。それでも日の高いうちはベランダで日向ぼっこをしたりもしていた。五時半ごろになっても空はまだ明るく六時すぎになるまで部屋でも証明をつける必要がなかった。シャワーがないのは仕方がないと思ったが、そもそもこう寒いと着替えをする気もしない。それで私はそこに泊まった二泊三日の間靴下も下着も替えず上着も着たまま、三日間全くそのままで過ごした。

糸紡ぎをする奥さん

夕食も食べやすい味だった。夕食の調理をしたのはウゲンさんだそうだ。彼が全品を一人で作ったのかどうかは知らない。でもブータンでこういう旅をしていると、ガイドさんや運転手さんたちと各地のホテルなどの従業員の人たちが皆知り合いなのではないかという気がしてくる。ひょっとしたら本当に知り合いがいるのかもしれないし、ただみんな誰もが人懐こくて会えばすぐに仲間意識が出来上がってしまうだけなのかもしれない。皆等しくブータンの観光業に携わっている人たちなのだから。

この家には四十歳ぐらいのご夫婦と小学校四年生の息子さんがいた。十歳にしてはいくらか小柄でいかにも田舎の子らしく素朴で可愛い。上の息子さんは中学生なので家を離れて寮生活をしているそうである。奥さんは私がガイドブックを見て知っていた通りキラとは違う衣装を着ていた。シンカという臙脂の縞模様の、貫頭衣だというがジャンパースカートのような形に見える。しかし完璧な民族衣装ではなく普通の洋服と組みあわせて着ている感じである。男性の民族衣装は見なかったが息子さんのは翌日ちょっとだけ見た。でも普段家にいるときにはズボンとかトレーナーとか世界中に普及した洋服を着ているようであった。

奥さんは夜、ヤクの毛を紡いで毛糸にする作業をしていた。ちょっと前の日本の女性も手が空いていれば繕い物や編み物などをしていたように、ブータンでは今でも当たり前のように女性が家庭で生活技術として糸紬や機織りをしているのである。日本ではそういう仕事は職業としてプロがやるか特別好きな人が趣味としてやるか、という扱いになってしまったがしかし料理については日本では今でも女性が生活技術として家庭の中でも頑張るべきであると期待されているなあという気がする。ブータンではウゲンさんに限らず男性もわりと気軽に料理をしている感じである。日本の家庭料理は少々難しくて男性が気軽に始めにくいのかもしれない。

ブータンは衣食住全てにおいて基本的に手作りをする国である。機械による大量生産は普及していない。お金がないとか技術がないとかいうよりもともと大掛かりに何かをやるということが好きではないらしいし、多分そういうことをするとむしろコスパが悪いのだ。しかし手作り品だけで現代生活を賄うのは無理なので手っ取り早く調達したい生活必需品は海外から輸入している。ブータン産のジャムやお茶やチーズやミネラルウォーターやジュースが売られてはいるがそれらもきっと小規模な工場（こうば）で作っているのだろう。どこにそういうものがあるのか私は知らないが「大工場」というような建物も私は見たことがない。

前述したようにこの村の人たちは木工を生業としている。私が泊ったのは宿の二階であったが、その二階部

分は二つの部屋に分かれていて、もう一つの部屋は木工の作業場であり朝七時ごろから夕方五時ごろまで何か作業をしている人たちがいた。家の外の狭いスペースでも柱に鉋をかけたりしている人がいた。

彼らはベッドやタンスなどの家具を作っているらしい。そういう製品をどこかに持っていって売るのだろうかと思って尋ねてみると、そうではなくてみなこの村で使うのだという。それで経済的に大丈夫なのだろうかと私は不思議だった。「木材を他の地方に持って行って売ったりはするの？」とも尋ねてみた。「それはある。」とキンレイさんは答えた。「でも個人で勝手に木を切って売ることはできない。それには政府の許可がいる。」とのことであった。ブータンの国は国土の保有する森林をとても大切にしている。こんなにたくさん木があるのにそれだからと言って「それを売って儲けよう。」という考え方はしないのだ。

月の美しい夜であった。満月だった。私はブータンのこの高地の村のそういう生活を好もしいと思った。寒くてベッドに潜ったまま何時間も過ごしたりしていたが、そういうのもたまにはよかろうと思った。が、トイレについてだけは悩ましかった。

私は緊張するとトイレが近くなる。だが夜中にも何度も寒い戸外に出て梯子を下りて１０m離れたトイレに行かなければならないのは流石に早く終わりにしたかった。しかもトイレットペーパーがなくなりそうなのである。私以外にも人が大勢いるのだからこれは困るだろうと思って私は夕食の時にキンレイさんにそう伝えた。キンレイさんはその場でそれをここのご主人に伝えてくれた。ご主人はわかった、と答えた。

しかしそのあと一、二時間たってもトイレットペーパーを補充する気配がない。どうして？と私は思った。日本ではトイレットペーパーがなくなると必ず気づいた誰かが指摘したり補充したりするが、ここでは私以外のだれもそういうことをやらない感じだ。何で？みんなトイレットペーパーがなくても困らないの？

「水洗でありながら水が流れにくい」「カミの供給が不十分」というのを問題だと感じるのは突き詰めてみると私が日本人だからかもしれない。日本人はかなり以前から水とカミをふんだんに使う生活を始めてしまった。私にとっては「インターネットを整備するよりカミの供給の方が先だろう！」と感じられるのであるが、もしかしたらブータン人を始め日本人以外の人々にとっては「カミ」の問題はそこまで重要ではなく、むしろインターネットの方が重要かもしれないのだ。ろくなトイレがない地域の人でも今や皆スマホを持っている。（ブータンでは流石に小学生は持っていない。多分早くても高校生以上だろう。）

日本だって五十年以上前までは今よりずっと紙や水を使わない生活をしてきた。私も紙や水の使用に対する感覚は昔の人に近い。私だって紙や水をふんだんに使いまくっているわけではなくティッシュだって大事に大事に使う。しかしそのことだけで日本人一般にとってはすでに顰蹙ものなのである。四十何年か前、私はティッシュをぐちゃぐちゃになるまで使う、汚い、と言われて友人たちからずいぶん非難された。しかしそういう私でも紙の節約には限界がある。

しかしここブータンの辺境の村においてカミが不足して困っているのはどうやら私だけのようだ。他の人たちは「何でそんなにカミ，カミと言うのだろう？」と思っているのではなかろうか。よく考えてみるとそうだ。日本人だって男性は小用の時トイレットペーパーを使わないのが普通だ。「大」の時には必要だが。女性も五十年ぐらい前までは「小」の時には紙を使わないのが普通だった。

しかしもちろんブータン人だって「大」のときはある。・・・これはだいぶ私の推測も混じっているが日本人は衛生についてばかりでなく栄養学についても関心が深いし経済的にも豊かで多種多様のものを食べる。だから外国人一般と比較して排泄物の形状が柔らかめであるらしい。その上日本人は腸が長いので排泄物は柔らかめである方が理想的でありコチコチやコロコロになると「便秘」として問題視される。しかし欧米人などは日本人と比べると便は「コロコロ」であるのが普通だと聞いたことがある。そうであればカミの使用は少量で済むわけである。

ブータン料理は野菜が多いんだけどなあ・・・と私は思うのだが仮にブータン人の排泄物の平均的な形状が日本人と同じようなものだったとしても、そもそもトイレというものがブータン人にとっては必需品というほ

どのものではなかったのだ、とは言えないだろうか？と私は考えた。「そのへんですればいい。」と考えているのではないだろうか？だってこんなに自然が多いのだ。わざわざトイレなどというめんどくさい設備を作らなくても「そこらへん」で済ませれば全部自然が処理してくれる。「カミ」だってなまじそんなものを置くから水が流れるとか流れないとかが気になるのである。

極端なことを言えばブータンの田舎ではトイレなんてなくたってかまわない。東南アジアの人口密集地とかならそういうことをしたら不衛生極まりないことになるが、ここは気候が冷涼であり人口密度も少なくヤクやヒトの排泄物が戸外に放置されていてもそんなに不潔感はない。しかしそんな生活では観光客が嫌がるので仕方なくトイレというものを整備した・・・。そんな感じではないのだろうか？もしうっかり外に落ちているものを踏んでしまっても笑い話で済むんだろうし・・・などと考えていたが、流石に翌日ここの息子さんが外に落ちているヤクの糞を手で拾って投げて遊んでいるのを見た時には「オーマイガー！！」であった。そういえばストーブの置いてある居間の壁に「手を洗いましょう。」というようなポスターが貼ってあったがそういう意味だったのか・・・？

４月２０日（土）

午前一時半ごろ目が覚めてトイレに行く。トイレットペーパーがとうとうなくなった。仕方がないのでこれからはなけなしのポケットティッシュを使用することにする。今晩に限らないのだが寝ているとよくのどが渇くので常に手の届くところに水のペットボトルをおいてある。あまりたくさん飲むとトイレに行きたくなるのでできるだけ少しずつ飲むのである。

昼間からゴロゴロしているので途切れ途切れに眠っているようだから夜中に目が覚めてそのまま眠れなくてもそんなに気にしない。２：３０ごろお腹がすいてチョコレートをひとかけら食べる。荷物の軽量化のため私はお菓子などはそんなに持ってきていない。チョコレートは残り少ないのでちびちび食べる。そうして長い夜が明け、７：００過ぎ、私はようやくトイレのペーパーが一個設置されているのに気が付いた。ホッとした。

９：００過ぎから１㎞ぐらい離れたところにあるゲンゴ・ラカンというお寺まで歩いて出かける。名ばかりのトレッキングである。「トレッキングもやってみたい」と事前に私が申し入れたからなのだが、別に高地トレッキングを希望したわけではなかった。ブムタンあたりにもトレッキングコースがあるらしいのでそこらへんが手頃かなあ、というイメージがあったのだが細かいことは旅行会社にお任せしていたらメラでトレッキングということになった。でも流石に長距離は無理だと思われたのだろう。「適当にそこらあたりを」という予定になっていた。

私とキンレイさんとウゲンさんと、四駆の運転手さんもいた。それに例の小学四年生の坊やが加わった。「道案内をしてもらおう」とキンレイさんが言ったのだ。しかし私は思った。ゲンゴ・ラカンへの道なんて私以外の全員が知っている。「道案内」など必要なわけがない。これはこの少年にいつもと違う体験をさせてやりたいからだよね、と。

学校は休みらしい。最近ブータンでは日曜日だけでなく土曜日も休みになったそうだ。少し前まで土曜日は半日授業だったらしい。しかし日本と同様「学力の低下」を心配する人もいるそうだ。

少年は家にいるときは日本の子供と同じような服装をしていたがその「トレッキング」に同行するときには別のものを着た。ウールの上着である。形はちょうど柔道着の上の部分のような感じで前を合わせた上から帯を締めている。下は普通のズボンのように見える。おそらくこのあたりの小学校の制服なのだろう。ブータンの大部分の地方では子供も男性はゴ、女性はキラというのが人前に出るときの服装であるが、タシガン県の奥地であるここメラや近隣のサクテンという村ではそれと異なる民族衣装を持っている。その土地で産出する材

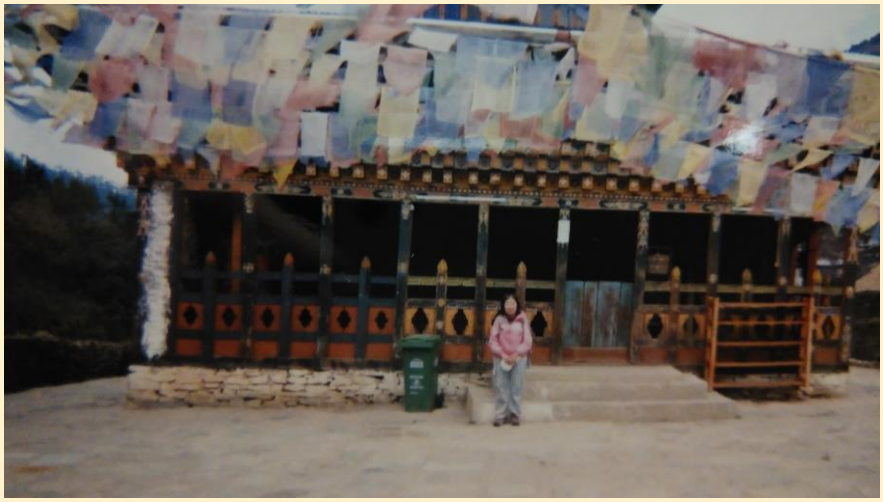
料で作られていて気候にもふさわしいのでとても合理的な感じがする。

私はキンレイさんにこのあたりの子供たちの学校の制服のことについて尋ねてみたのだが「女の子はキラではなく大人の女性と同じシンカなのか？」と聞いたら「シンカでもいいしキラでもいい。それぞれの都合でどちらでもよし」とのことであった。

さてトレッキングだが３５００ｍの地は厳しかった。外に出て１０歩も歩いたら私はもう苦しくなった。でも立ち止まっている時は大丈夫なのである。それで頑張ってゆっくりゆっくり歩いた。他の人たちは当然何事もない。もともと高地に住む人たちだし若いし走ったって大丈夫だろう。こんな私のために四人もお供がいるというのが滑稽でならなかった。ゲンゴ・ラカンまではとても長く感じたが実際には片道三十分か四十分ぐらいだったろう。お参りをして写真も撮ってまた宿のところに戻ってきたのは二時間弱ほど後のことだった。

あの雪山はジョモ・クンカル（４３１９ｍ）だろうか？

ヤクの頭骨。自然死⇒犬に食われる⇒白骨化、という流れ。



ゲンゴ・ラカンの前で

しかし最後のところで私は泥道に足をつっこんで滑って転んで左足が泥だらけになってしまった。ズボンやキャラバンシューズを洗濯しなくてはならなくなったがベランダにはよく風が当たり、手絞りの洗濯物も何時間もかからずに乾いた。しかし洗濯に使ったトイレ（兼・洗面所・兼・台所仕事用の水くみ場。水道がその場所にだけある）の小屋の中の汲み置き水は手が切れるほど冷たかった。

美しいニワトリ！　感動する。

午後はやはりずっとベッドに潜っていた。寒いし酸素が薄いんだし無駄に動く必要はない。

４月２１日(日)

今日はようやく下界に降りられるぞ！とワクワクしている。ここはとてもいいところなんだけどやっぱりトイレがね・・・、それに着替えもしたいしシャワーも浴びたい。

ところで宿へのチップのこと。やっぱりこのような宿に、日本円にして１００円や２００円くらいのチップを置いてくるのって変だ。そりゃあ１０００円分くらい渡したら喜ぶかもしれないけど、（以前別の民宿のよはところでガイドさんに言われてご主人に１０００円程度のお礼をお渡ししたことがある。ちなみにお金はむき出しでかまわないのだそうだ。普通の習慣なのだそうである。もちろん正規の料金は旅行会社から、いや多分直接にはガイドさんから支払われているはずである。だから義務ではないが「気持ちなんだ」と言われた。でも今回はガイドさんも何も言わないからいいだろう。）私のフトコロも寂しいし・・・、そういうわけで私がいざという時の食糧としてひと箱だけ持っていた「プリッツ」を子供さんにあげることにした。あまりにもささやかだけどちょっとしたプレゼントとしては悪くないだろう。喜んでもらえたと思う。

出発前に。左から息子さん、奥さん、私、旦那さん、運転手さん。

朝９：００出発。四駆は１００ｍほど離れたところに置いてあったのでそこまで歩く。そして気付いた。前日は十歩歩くのも大変だったのにこの日はこの程度なら普通に歩ける。体が慣れたんだな。本当にゆっくり慣

れるものなんだなと。２４００m地点なら一日いれば慣れるが３５００m地点だと二日かかるということだな。

そういえば話は二日前に戻るがラディからここメラに向かう途中、道の途中で歩いていた一人の女性が「乗せて下さい」と言ったので同乗させた。車の形状が小型トラックだったので荷台の上に、私たちの荷物がブルーシートをかけて置いてあるのと一緒に乗ってもらった。しかし私はかなり疑り深い性格なので内心「この人、荷物をいじったりしないだろうな？」とか失礼なことを考えていた。しかしこういうのはブータン国内では普通のことのようで、その女性はもちろんそのような悪い人ではなかった。しれからそのあとでももう一人若い男性がピックアップされた。ラディからメラの間は車でも（ガタガタ道なので）３～４時間かかるのだが地元の人が買い物などで出かける場合は歩くのが普通である。一日がかりで往復するのである。そして運よく車に行き会えば便乗させてもらう。国全体が親戚みたいな友達みたいなそんな世界だなと思った。

だから私も高度馴化にどうせ二日かかるならラディからメラまでぐらい歩いてみたいものだと思った。そうすれば身体が慣れるまでただ寝て過ごさなくてもいいし、素晴らしい景色をもっともっと堪能できる。山や谷の景色もそうだがヤクなどの動物たちの姿もかわいい。

そういえばこのあたりの地方でたくさん放牧されているヤクだが、これは牛ぐらいの大きさだが本来真っ黒でもじゃもじゃした毛に覆われた動物である。顔つきも牛とはだいぶ違う。ちょうどディズニーの「美女と野獣」に出てくるあの野獣の顔を思い出すといい。あれを真っ黒にしたような顔をしている。ところがメラに上ってくる道々で草を食んでいるヤクたちの姿が変わっていることに気が付いた。全身は黒いのにしっぽだけ真っ白な奴、逆に顔だけ白い奴・・・、変なのがいろいろいる。白黒まだらの奴も多いがそのまだらの具合がホルスタインとはちょっと違う。何とも不思議な模様の体をした奴らだった。

初め私は「ヤクがいる」と思って見ていたのだが、ふと気が付いた。あれ？もしかしてキミたちは牛ですか？顔を見るとかなり牛に近い。「野獣」のイメージと比較してみるとかなりイケメンないしは美女である。ふいに私はひらめいた。これはヤクと牛のミックスか？キンレイさんに「ヤクと牛は交配できるのか？」と聞いてみるとできるとのこと。そうかー、そうだったのかー。君たちは牛とヤクとの自由恋愛の結果生まれたんだね？

しかし後になってからもっと詳しく聞いてみるとそういうのばかりでもないことがわかった。ヤクのチーズと牛のチーズでは味が違う。そしてヤクと牛のミックスの乳から生産するチーズもまた味が違い、そちらの方が高級品であるということだった。ということは、彼らは自由恋愛というよりむしろ「お見合い」で結婚するケースが多いということだ。

高地の村を去ることに一抹の寂しさもあったがやはりより安楽な下界に戻る嬉しさの方が大きかった。車はガタガタと山を駆け下りやがて見覚えのある山の景色を認めて１１：３０ごろラディに到着。私は結構通過した過程で見た山の景色とか特徴のある木立の姿とかを覚えている。

四駆の運転を担当して下さった運転手さんのお宅の・・・

綺麗なサロンでお茶をいただいた。

奥様お手製ののれん

四駆とそのドライバーさんとはここでお別れなのだが、なんとご親切なことにその方のお宅でお茶をいただけるということであった。小さな村の民家だが、ひょっとしてお金持ち？と思うような庭も外観もインテリアも美しいお宅だった。玄関から入ってすぐが客間というか応接間という感じになっていたが、その部屋と他の各部屋との間にはブータン風の美しい絵柄の見事な刺繍が施されたのれんがかかっていた。

「これは奥様のお手製でしょうか？」と尋ねるとキンレイさんは近づいて見て

「仕上げがイマイチなので、そうでしょう。」

みたいな失礼なことを言った。プロなみの仕事ではない、ということらしい。が、とんでもない。それらはとても素晴らしい作品に思えた。

その運転手さんにはチップを１０００ヌルタム渡した。二日間お世話になったのだから妥当だと思う。そのあと三日前に泊まった「ラディ・ツァンカル・ホームステイ」で昼食をいただく。そして出発。ラディを過ぎたらなぜか突然暑くなる。

ここは三日前に泊まった宿。その時は置かれていなかった機織機。

庭には綺麗に花が植えられていた。

１５：００ごろタシガンのホテル「リンカル・ロッジ」に到着。なんだか一段と高級感のあるホテルである。よくある美しい庭に囲まれたコテージ式のものだが敷地が広いし入り口に立派な門があったりしてまるで宮殿のようだ。アイドルのような顔をした美人メイドさんに案内されて部屋に行くのがなんだかとても恥ずかしい。（隣にいる人との美醜の差が激しいと恥ずかしく感じる。だから超イケメンな人も苦手である。）

部屋に入り荷物を解いたらまずシャワー・・・と思ったがバスルームはちょっと変わっていた。洗面台は立派なものでアメニティグッズや歯ブラシまで置いてあった。日本のホテルでは当たり前だが石鹸やシャンプーはともかく歯ブラシというのは外国のホテルではまだお目にかかったことがなかった。が、バスタブはなかった。でもシャワースペースはバスタブが置けるくらい広かった。トイレ、洗面所のスペースより床が

１㎝ぐらい低くなっていたがこれだけの差ってあまり意味がないんじゃないかと思った。シャワーカーテンはついていた。それとバスタブの代わりというわけでもないだろうが大きなバケツというかプラスチックの桶が置いてあった。幼児の体なら入るくらいの大きさだが身体を洗うときに利用すると確かに便利だ。

しかし排水があまりよくないなあと思って排水口を調べてみると前に使った人の髪の毛が引っかかっていたので私が掃除をした。どうせヒマだしいちいちクレームをつけるようなことでもない。しかしこんな高級ホテルなのに解せないことにバスタオルがなかった。そういえばモンガルで二泊したホテルでもなかったな。これもクレームをつけるなどは面倒なので自前の小さいタオルを使用する。

部屋の窓際はベランダのようになっている。

ブータンの家具調度品は瀟洒で愛らしい。

家には毎日メールやラインを送っている。いつ通信に不具合が生じたりしはしないかという不安から、必ず夫と息子と娘の三か所に送っていた。スマホの充電、またダメだ！と思って一度諦めたがいろいろいじって試していたらできた。本当にスイッチを切り替えてからやるとかいろいろコツがあるようだ。

７：００、夕食に行こうと別棟のレストランに向かうがレストランの建物は真っ暗で人影がない。何これ？！と困惑しロビーのある方に向かって歩いて行くと二人連れのメイドさんが通りかかったので「これはどういうことか？」と尋ねようとしているとそこにキンレイさんが駆けつける。

「予定変更。今夜の夕食はオーナーのお宅で、ということです。メイドさんたちがご案内します。」って・・・はあ？

わけのわからないまま暗い道を誘導される。例の立派な正門を出て、その前を通る車道（時々車が来るのでちょっと怖い）を左に１００ｍぐらい。緩い坂を登って行くとオーナー様御邸宅の門がある。そこを通過して５０ｍぐらい行くとお屋敷がある。しかし私は玄関とかではなく手前の勝手口のようなところに誘導された。中はかなり庶民的なダイニングキッチンだった。（あ、でも一般家庭よりはかなり現代的な感じだ。我が家のダイニングキッチンと同じようなものだと思ったが、考えてみれば一般家庭のキッチンや民宿のキッチンは日本でいえば昭和三十年前後ぐらいの設備だった。）

そこで奥様が無口なメイドさんと快活そうなお嬢様に手伝わせてお料理をしていらした。間もなくご主人様も入ってこられた。そしてまことに家庭的な雰囲気の中で奥様が作って下さるお料理をいろいろいただいたのだが、お三方の質問攻めにあいながらのお食事は味わうどころではなく早く逃げ出して部屋に戻りたいと思い続けただけのひと時であった。しかし食べ終えてもすぐに出ていくわけにもいかずさらに少し会話を続けたが、ここはスマホの写真をお見せして間を持たせることができた。　こういう仕儀になったのはその晩は私の他に宿泊客がいなかったからなのだそうである。しかし何の心の準備もないままでいきなりそういう場面に出されるのはもうご勘弁いただきたい。「明日の朝はどこで召し上がりますか？お部屋で？レストランで？」と尋ねられて私はレストランを希望した。自室とはいえ「これから誰かが来る」という緊張感はあえて味わわなくてもよい。

写真はこれだけしか写せなかった。それどころではなかった。

奥様は日本に行かれたことがあるとか・・・

帰りはお嬢様と二人ぐらいのメイドさんが部屋まで送って下さった。お嬢様は多分二十歳前後で小柄で可愛らしい顔立ちに眼鏡をかけた方で、ホテルのメイドさんと同じ服装をしていたのでホテルのお手伝いをしているのだろうと思った。食事中の会話の中で「メラはとても寒かった」ということが話題になった時私が「メラ、メラ」と言うと彼女に「メラック」と直された。いい加減な発音をされると不快なのだろう。私も韓国語を勉強したことがあると、「クッパ」とか「キンパ（海苔巻き）」とか「マッコリ」などという発音や表記をされるとちょっと不快になる。もっと正確にカタカナ表記をすると「ククパプ」であり「キムパプ」であり「マッコルリ」なのである。まあ日本人は総じて子音を単独で発音するのが苦手なので出版物の表記も無理に正確さを追及するとキザだと思われるかもしれないということでそうなっているのかガイドブックに書いてあるブータンの地名は「メラ」とか「トンサ」とか「チェンデジ」になっている。正確には「メラック」「トゥロンサ」「チェンデプジ」である。

夜９：００過ぎに部屋に戻ったのだがどうも脳内にアドレナリンが噴出しているようで全く眠くなる気配がなかった。まだ十時前だからそんなに急いで眠らなくても構わないのだが、それにしても何とかしてこの脳内の異常事態を鎮めたかった。まだこのホテルに着いたばかりの時、何だか部屋の外だか隣の部屋だかから子供の声も混じった複数人数の声がしたので、隣の部屋はご家族連れかな？何だかめんどくさいなあと思っていたのだがさっき他に宿泊客はいないと聞いて？？？とは思ったが夜戻った時には周囲はシーンとしていたので本当に誰もいないんだなと思い、それでは、と結構大声を出して一人カラオケならぬアカペラで歌を歌ってみる。思いつくままに十曲ぐらい歌い上げたところで何だかバカみたいと思ってやめる。そしてベッドの上でいろいろストレッチをやる。そのうち気持ちが落ち着いてきたのか１２：００ぐらいから眠ることができた。

４月２２日（月）

朝５：００目が覚める。５：１０～５：１７停電。

チップは置いてこないことにした。こんな高級ホテルで１００円～２００円程度のチップってむしろ失礼じゃないかしら？ひょっとしたら私の使った部屋の片づけにお嬢様が来てしまうかもしれないし。でもこんなふうに考えてしまうのはホテルが立派か否かによってではなくてホテルの人たちと自分の関係がビジネスライクな感じのまま終わっているか家庭の客的になってしまったかによって違ってきているんだろうと思う。それにどちらかといえば昨夜は私があちら様を楽しませてあげていたような気がする。

七時五分前ぐらいに部屋を出て、食堂棟までの美しい遊歩道を散歩する。つい何枚も写真を撮ってしまう。

客が私一人だけの食堂ではテラス席に朝食が用意されていた。今までにブータンで食べた洋風の朝食の中で一番素敵なプレートだった。なぜならトーストやフライドエッグ（目玉焼き）の他にキャベツのソテーと焼きトマトがついていた。朝食に野菜がつくのは稀なことである。フレッシュジュースが付くことはあるが、朝食のために煮たり焼いたりの調理まではしないのが普通らしい。卵を焼くだけで充分でしょ、みたいな感じ。あといかにもナチュラルな雰囲気のチーズがあった。牛なのかヤクなのか山羊なのかわからないが、好きなので食べきれない分はトーストと一緒にしっかりテイクアウトする。固くなってもかまわない。

八時半ごろホテルを出発。お嬢様やメイドさんたちが見送って下さる。ご主人も出てこられる。しかし非常にラフな格好である。Ｔシャツにショートパンツのような・・・。まあ私は賓客というわけではありませんからね。ちなみにこのご主人は数年前まで大臣をしていらっしゃったそうであるが何かあって辞められたそうである。しかし今でも地元では有力者であるらしい。

ここからタシガン県を出てインドとの国境の町であるサムドブ・ジョンカルに向かう。途中、カリンという村の織物工場を見学する。建物の二階で女性が三人座って腰にベルトをかけて縦糸を引っ張る式の織機（コマ村で見たのと同じ）で作業をしていた。「工場」というにはあまりに小さな建物であり小規模な作業所なので「工房」という方がふさわしい。一階が作品の展示販売所になっていたが私は何も買わなかった。もうお金がないし・・・。

それから一路サムドブ・ジョンカルに向かう。カメラのフィルムが少なくなってきたのでこのあたりからほとんど写真を写していない。そのせいで今記憶が明確に残っていないことに気づく。残念である。面倒くさがらずにもっとスマホで写しておけばよかったと思う。かすかに思い出せるのは道がわりと険しかったこと、けっこう長時間霧に覆われていたことである。スリリングであったし思ったより寒かった。これから南の低地に向かうので暑いだろうと思って薄着をしていたことを少し後悔した。

途中なんだかとても立派なモニュメントがあった。しかしガイドブックに載っていないので正確な名称がわからない。ガイドさんにきちんきちんと質問するのを面倒がるからいけないのだ。前国王陛下の還暦のお祝いに作られたものだそうであった。とすれば四年ぐらい前にできたことになる。写真も一枚だけ写したがかなり大きな建造物のほんの一部分しか写真におさまっていなくてむしろわかりにくいので申し訳ないがここには載せなかった。それから前日だかに山火事があって「ほらまだすっかり消えていなくて煙が立っている」とか言われたがよくわからなかった。

途中、タシガンとサムドブ・ジョンカルとその西側のペマ・ガツェルの三県の分岐点であるツェリンコルを通過したのがわかった。昼食はサムドブ・ジョンカルに着いてからだという。それまで食べるところがないそうである。到着は二時ぐらいになるのでそれまで少しお腹がすく。途中ナルプンだろうか、商店の並ぶ街があってキンレイさんとウゲンさんが何か買い物をした。粉類や豆類、穀類を売っていてあとスナック菓子も置いてあるような店だった。

そこでキンレイさんがクルミを買ったので「何を使って割るのか？」と聞いたら「歯で」と言ったのでびっくりした。冗談かと思った。一体どんな歯をしてるんだ？しかしそのあとキンレイさんがそのクルミを分けてくれてわかった。それは私の知っている固いクルミとは違って、私の歯でも割れるようなものだった。初めクルミの種類が違うのかと思ったが、もしかして何か加工してあるのか？と思いついて「これは焼いてあるのか？」と尋ねると「油で揚げてある」とのことであった。それはとても美味しくて、これならお土産に買って帰ってもいいなと思ったがその後買う機会がなくて終わってしまった。

（帰ってからネットでクルミについて調べてみたがどれも「簡単には割れない」という前提のもとに書かれていた。水につけてから乾煎りするとかくるみ割り器の紹介とか。「油で揚げる」ということはどこにも書いていなかった。試しにやってみたら？とも思うがバクハツしたりしやしないかと思うとちょっと怖い。）

キンレイさんはクルミの他にも日本のスナック菓子のカールを巨大な棒状にしたようなスナック菓子を買ったのを分けてくれた。これはとても美味しかった。カールのように歯の裏側にくっついたりはしなかった。しかしかさばるし潰れやすいだろうし、手荷物に入れて日本まで運搬するには向かないなと思った。

午後二時近くなってようやくサムドブ・ジョンカルの町に着いた。かなりトロピカルな雰囲気の町で、人口の半分がインド人ではないか？という印象である。ブータンの他の町より賑やかで開けていて都会的ではあるがちょっとゴミゴミ、ゴチャゴチャした感じにも見える。

あるレストランに入った。ようやく昼食にありつける。気温はだいぶ上がっていて、店内は扇風機がつい

ていて頼むと冷水が出てきた。とても美味しい。今まで冷やした水を飲みたいとは特に考えたことがなかったので冷たい飲み物の存在を忘れていた。そのことがおかしかった。

しかしトイレを借りたところ、例によって大きなバケツに貯めてある汲み置き水がものすごく汚い色をしていてオェーッ！と思った。今までセンゴル村やメラ村のトイレで見た汲み置き水は、一見「飲んでもいいんじゃないか？」と思ってしまうほどきれいだったのである。冷涼な高地においてはさほど衛生に気を使わなくても生きていけるのかなという気がした。

サムドブ・ジョンカルの「メンジョン・ホテル」というところに入る。少し暑い気候なのでヒーターではなくクーラーが作動している。

家にメール。ちょっとトラブルがあったが回復。息子と娘にもライン。

【残金確認】

明日別れる時にキンレイさんに１００ドル（九日間お世話になった。）、ウゲンさんに５０ドルと１５００ヌルタム（八日間お世話になった）を渡す予定で別にしておく。

そうすると残金が１３９０ヌルタムと１００ドル。ヌルタムはインドに入国したらルピーと交換しその中からパックに入っていない明日の夕食代を支払ってのこりはインド側のガイドさんと運転手さんにチップとして渡す予定。（その前にホテルへのチップだ）残りの１００ドルは経由地のシンガポールで使うかも、ということである。

このホテルへのチップは端数の９０ヌルタムにしようか？いや５０ヌルタムでいいや。シャワーもお湯も使わないし（面倒くさくなった）充電もできなかったから。

夜八時から夕食に行くと、最後だからということでキンレイさんとウゲンさんが同席してくれた。やはりブータン定食であったが少し高級な感じがした。初めに出たパンプキンスープがとても美味しかった。いつもは私の五倍量をガッツリ食べる彼らがなぜか今夜は食べ方がとても上品だった。

いつものことだが私は食事のあと胃もたれがする。けっこう頑張って多めに食べるからである。だから食後はいつも横になっている。まあ総じてヒマなのでゴロゴロしながら眠ったり目覚めたりしているわけだがその晩は２２：００ごろから眠り１：３０ごろ一度目覚め、そのあとは断続的に眠った。ところでメラの民宿でトイレとペーパーのことで悩んで以来私の快便鉄道はストップしてしまった。その後すぐに状況が改善したにもかかわらず、三日たつのにまだ開通しない。デリケートなんだなあ・・・。

４月２３日（火）

朝７：００に国境ゲートでインド側のガイドさんたちと待ち合わせの予定なのだそうで、６：３０に朝食を済ませてホテルからほど近い国境ゲートに向かう。実は昨日下見もしてあった。インド側スタッフは１０分ぐらい遅れて到着。私を通過させるための手続きをしてくれて無事にバトンタッチされる。

国境ゲートを抜けたらまるで別世界であった。ブータン側は近景に高く深い山並みを望む世界、インド側はド～ッと広がる平野の世界である（車で走行する途中に低い山が見えることはあったが）。それと当たり前のことだが周囲はインド人ばかり！なんとみんな肌が黒い。今まで私は「インド人は色の黒い人もいるがそうでない人もいる」という認識だったがたまたまこのあたりの地域にはそういう民族が住んでいるのかもしれないが、ほとんどみんな黒い。異世界に来てしまったようでとても緊張する。ガイドのナスィルさんもドライバーのハレン・ハロイさんも超色黒である。そしてさっきも書いたがここからはほとんど平原の世界。木々はトロピカル、家々はオンボロ（失礼！）栄養不良ぎみの家畜や犬たちがうろついている。しかし道路

はそても状態が良く、ドライバーはハイウェイ並みに飛ばすのでちょっと怖い。人も普通に歩いているし。そして自転車がかなり走っている。鉄道や踏切も見える。ブータンにはなかったものなので目に新鮮に映る。

９：００過ぎごろグァハティの町の「ホテル・キロンシェリー・ポリティコ」というところに着く。超×３ぐらいの高級ホテルである。しかしこのホテルの周囲は信じられないほど汚くてゴチャゴチャしている。世界中に展開する有名な店（ケンタッキーとかＩＴ関係とか）とわけのわからないゴチャゴチャした建物とが混在している。いわゆる繁華街らしいのだが瓦礫のような物やゴミが散乱している。貧富の差が大きいということなんだろうが、それにしても飢え死にしそうな生活をしているというわけでもなさそうな近隣住民の方々よ、もう少し町や自分の家のまわりをきれいに片づけたらどうですかね？と言いたくなる。

まだ九時過ぎだが私はチェックインしたあと翌日の朝まで外に出る必要も希望もないのでまる一日この中で過ごそうと思った（正確には二十時間ほど）。それで超×３の高級ホテルがどんな様子だったのかというと、まず入り口にセキュリティのためのゲートがあった。そしてロビーはとてもゴージャスだった。色黒のホテルマンたちがスマートな制服で控えていた。チェックインの手続きをしている間にボーイさんが紅茶とお皿に載せたクッキーを運んできてくれた。それは高級そうなクッキーで４～５枚もあったので嬉しかったが何しろまだ朝の九時なのですぐに食べられる状態ではない。「お部屋でいただいていいですか？」と尋ねると「もちろん」とのこと。それでは、と紙ナプキンに包もうとすると「後でお持ちします」と止められた。恥ずかしや、育ちの悪さを露呈してしまった。

ガイドさんはチェックインの手続き（私はサインをするだけ）とあとランチは支払いなしで食べられるようにと前もって支払いをしてくれ（キンレイさんに頼まれていた）、夕食を食べる場合だけ後からの支払いになるということを確認してくれた。それからヌルタムからルピーへの両替はガイドさんがしてくれた。手数料を取らずに。それで１３４０ヌルタムが１３４０ルピーになった。そして明朝５：３０に迎えに来てくれるということで私たちは別れた。明日のドゥク・エアー、シンガポール行きのフライトは８：３０である。

さて部屋に案内される。鍵はカードキーで、ブータン国内でよくあった「固くて動かせない」という問題とは無縁であった。部屋は通常の「良いホテル」風。テレビがあった。ブータンでもテレビのある部屋はよくあり、過去にブータンの番組を楽しんだ経験も多いのだが今回はどうやったらテレビがつくのかわからないことが多くて部屋でテレビを見たことは一度もなかった。わざわざ人を呼んで聞くのも面倒くさかった。（しかしメラの民宿の居間にはテレビがあったので皆と一緒に見た。のど自慢のような番組をやっていた。ブータンのテレビ番組は言葉がわからなくても内容がわかりやすい。）で、ここのテレビはつけるのが簡単だった。久しぶりのテレビ！ヒマなので思いっきり楽しもうと思ったのだが・・・

しかしこの日はインドでは総選挙か行われていて（地域ごとに日がちがうらしい。開票結果とかを見ているとインドとはいっても国全体ではなく東北部の地方だけのようだな、と思った。）どこの局もそのことばかりだった。それでも投票のために並んでいる人々の様子や服装などを眺めて楽しむために私はずっとテレビを見ていた。

インドの人たち、特に女性はサリーとか民族衣装を着ている人が多い。特に一般庶民はそうである。先ほどホテルのフロント付近でインド人のお金持ち風のご家族を見かけたが彼らはすっきりとしたデザインのハイセンスな、そしてスポーティな洋服を着ていた。なるほど、ああいう服装で旅行するのはセレブなのだな、と思った。ブータン国内にはインド人の旅行者がよく見かけられるが女性はよそ行きらしい綺麗なサリーを着ていることが多い。ブータンのキラを着せてもらって楽しんでいるインド人女性も見たことがある。例え貧しそうなひとのものでも女性が色とりどりの美しい衣装を着ているのを見ると心がなごむ。例えゴチャゴチャした埃っぽい町の中でも。

私が部屋に入って１０分ぐらいたつとボーイさんがさっきのクッキーを運んできてくれた。まことに恐縮なことであった。

１２：００過ぎにホテル内のレストランにランチに行ってみた。他に客はいなくてスタッフさんたちがヒマそうにしていた。しかしいかにも高級そうで、敷居の高さを感じるレストランだった。私はそうであろうと予想していたので汚れてもいいようなアウトドアスタイルで行くわけにはいかないと思い、一番キラらしいキラで行った。（ハーフキラとか上着は洋服、とか私はいろいろなキラバージョンを着まわしていた。）そうすれば注文などの時、多少もたついてもそうみっともなくはないと思った。

ランチの会計はすでに済んでいるらしいが本当に何を食べてもいいのか確信がもてず不安なので出来るだけ安いものを選ぼうと思う。しかし単品で頼めるもののページがなかなか見つからず注文に手間取ったがようやくパスタのページを見つけて一番安いペンネのクリームソースを頼んだ。３５０ルピーだった。７００円ぐらいということか。このホテル内のレストランの料理にしてはお手頃な価格だ。（現地の人々にとっては目の玉の飛び出る価格かもしれないが）それはとっても美味しかったが残念ながら量が多いので半分食べるのがやっとだった。

会計はなかったがサインを求められたりしてなかなか気の張るランチであったのでもう夕食の際には来なくていいやと思った。実はこういうこともあろうかと思って朝食のトーストやチーズをテイクアウトしておいたのだ。固くなっていたって構わない。贅沢な食事を食べきれずに捨てなければならない方がよほど不快である。ディナーの方がランチよりさらに量が多くなるに決まっているし。それでこの日の夕食代がまるまる浮いて、次の日ナスィルさんたちに渡すチップ分は余裕で残った。

４：００ＰＭごろ誰かが来た感じ・・・ドアを開けてみるとボーイさんが一人分ずつお皿に載せてラップをかけたチョコレートを配っていた。こんなサービスがあることに驚いた。

夕方６：００ごろシャワーを浴びる。タシガンのホテルにもあったようなバケツが置いてあったがバスタブはなくて残念だった。

４月２４日（水）

３：３５AM、四日ぶりにやっと快便鉄道が再開する。ホッとした。これからエコノミーで７時間＋７時間、間にトランジット６時間と言うハードな空の旅をしなくてはならないのだ。体調を整えておくに越したことはない。

朝５：１５ごろからロビーに出て迎えを待っている。ロビーの隅のソファーで寝ていた当直らしいホテルマンが私に気づいて慌てて起きる。かまいません、寝ていて下さいまし、と内心思うがもちろんそんなことは言わない。フロントの奥にはちゃんとスタッフがいたようで、チェックアウトのサインなどを求められる。

それが済んでまたガイドさんたちを待つ。ちゃんと遅れずに来てくれるだろうな？何しろ飛行機のフライトの時間というものがあるんだから。もし来なかったらどうしよう・・・？私はなかなか疑り深い、というより心配性か。しかしナスィルさんはちゃんと現れた。三分遅れだったが。ああ、よかった！

ところが一つ予想外の面倒が起こった。ホテル側が朝食抜きで出発する私のために大きな袋に入ったお弁当を用意してくれたのだった。えーっ、困った。搭乗した後に朝食が出ることになっているし食べきれない、ということばかりでなくこんなものを持っていたら荷物検査を通過するのが難しい。私はこれをナスィルさんたちに頼み込んで貰ってもらうことにした。「おなかいっぱいだから」と断られたが「後で食べて下さい」とむりやり押し付けた。

３０分もかからず車は空港に到着。ナスィルさんとハレン・ハロイさんにそれぞれチップを５００ずつ渡そうと思っていたが（ちなみにホテルには１００だけ置いてきた）ナスィルさんが私と一緒に空港前で車を降りて荷物を運ぶのを手伝ってくれてその間に運転手さんは車を移動させてしまったのでそちらにチップを

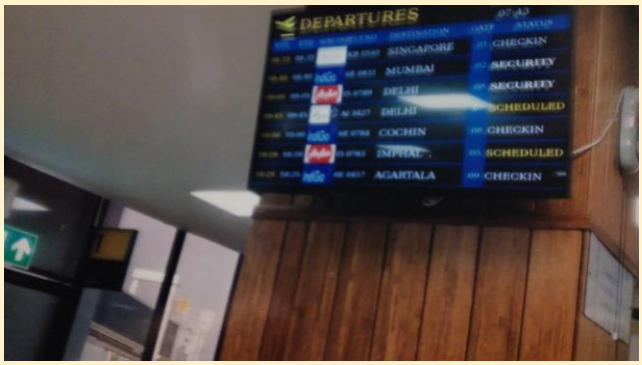
渡すタイミングを逃してしまい運転手さんの分もナスィルさんに渡して下さいとお願いすることになった。疑り深い私は「ちゃんと渡してくれるだろうな？ネコババしたりしないだろうな？」と考えていたがそれは確認するすべがない。だからもう私の知ったことではない、あとは野となれ山となれ、と思うことにした。

グァハティ空港は建物は近代的だが大きさはパロ空港と同じくらいである。日本の中規模程度の鉄道駅と同じくらいの広さ。それでも初めての空港というものはまごつくものである。まずどこに行ったらいいのかわからない。構内を見回っている職員さんに頼んでドゥク・エアーのカウンターに案内してもらった。

ところがまた予想外のことが起きた。「シンガポールのビザは？」と尋ねられたのだ。今までそんなものが必要だなんて聞いたことがない。もしかして旅行会社の手配ミス？・・・しかし私は「そんなことは聞いていなかった。私はただトランジットでシンガポールの空港に数時間滞在するだけである。」と言って通した。

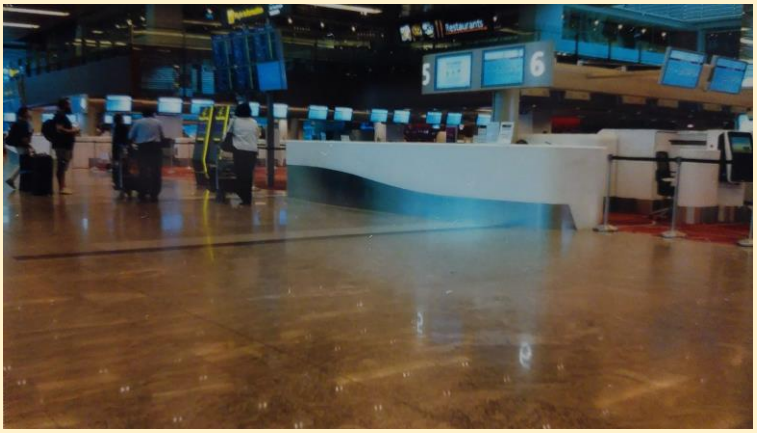
カウンターの奥のスタッフさんたちのやり取りの内容はわからなかったが私はそばの待合席で２０分ほど待たされた挙句、結局のところそこを無事に通過することができた。そのあと荷物検査があったが、なぜかほんの短い区間を通過する間に同じような検査を二回もされた。そのあとドゥク・エアー専用の小さな待合室でフライトまでの３０分を過ごしたがそこにはウォーターサーバーとトイレがあるだけだったのでこの空港内で売店を見て回ることはできずに終わってしまった。

グァハティ空港のチェックカウンター



出発機の案内はこれだけ

そして無事にドゥク・エアーのシンガポール行きが出発。予定通りにシンガポール、チャンギ空港に到着。ここの空港も初めてなのでやはりマゴマゴ。空港によってそれぞれに出入国の手続きの手順が微妙に違うのである。到着後の手続きが済んでからもだいぶウロウロと迷った。パロやグァハティと違ってかなり広いから。しかしようやく落ち着いてロビーの椅子に収まって時間を過ごしているうちに、ああ、この空港は少し羽田に似ているなという気がしてきた。成田にはあまり行っていないので比較できないが何となく羽田の方に似ている気がする。日本語の表記も多いしセブンイレブンがあったりした。商品は日本のものと同じのもあり違うものもある。それから羽田空港内にもありそうなレストランの並ぶフロアがあったりする。



シンガポール　チャンギ空港

私はセブンイレブンを見に行き、そこでお土産の買い足しをした。米ドルは使えるか？と尋ねたら使えるがお釣りはシンガポールドルになる、ということであった。それでＯＫということで買い物を済ます。荷物量は特に増大せず。リュックに軽くおさまりあとは衣類とキャラバンシューズを詰めたバッグとすぐに必要な貴重品を入れるポーチだけで楽々移動。それでも４．５kgのバッグを手に持っているとよく知らない人から声をかけられる。「大丈夫？カートを使ったら？」と。いいです。カートって場所をとるし。

私の荷物はこれで全部です。ホテルにて。

帰りの機内でどんな食事が出たのだったか考えてみるがよく思い出せない。食事の回数は意外にも一回だけだったということは覚えている。それからあまり食べやすくない食事だったことも覚えている。あ、そうだ、親子丼みたいなものが出た。米は日本の米だったし熱々だったが卵の固まり方がスクランブルエッグのようだったし鶏肉は唐揚げを煮込んだようであまりいただけなかった。深夜だし、みんな疲れて食欲モリモリとはいえない状態なんだからスライスパンのサンドイッチとかおにぎりとかでいいよ。もっと食べやすいものを出して～という気分だった。

４月２５日（木）

予定通り朝５：５０に羽田に到着。そんなにヘロヘロでもなかったので大宮まで帰るのにリムジンバスを待たずにすぐモノレールに乗る。浜松町で京浜東北線に乗り換えてすんなりと大宮駅に到着。羽田を出てから二時間弱で家に着いた。バスを使わなくてよかったな。節約になったし。節約こそ次の「ビジネスで行くぞ！」の旅に向けての準備の第一歩なのである。

【完】

【追記】シンガポールビザの件、あれはグァハティ空港のスタッフの方々が「日本人はシンガポールビザ不要」ということを知らなかったためであるらしい。